

## The Gold Diggers: A Novel

Sue Nyathi

Johannesburg: Pan MacMillan South Africa 2018 281p.

現在、南アフリカには150万とも300万とも言われるジンバブウェ人が暮らす。その多くが、国内の政治経済的混乱を逃れ、「青々と茂る隣の芝生」を求めて移住した人びとである。彼（女）らが目指したジョハネスバーグは金の発見とゴールド・ラッシュを通じて発展した南アフリカ最大の産業都市であり、同地のズールー語で「エゴリ」（金の街）と呼ばれる。

本書の主な登場人物は、ジンバブウェでハイパーインフレが最も激しかった2008年、南部の都市ブラワヨでパスポートを持たずに南アフリカを目指す人びとを運ぶ小型バスに乗り合わせるようになった。結婚して家族を持ち、数年前まではミドルクラスの生活を送っていた男性、ジョハネスバーグに暮らす夫のもとへ幼い子どもを連れて向かう母親、両親の離婚後に父親の暴力に悩まされてきた兄妹など、彼（女）らの生い立ちや生活環境はさまざまである。乗客は国境前でバスを降り、案内人に率いられて国境を越える。これは時に命すら奪われる危険を伴う。南アフリカに入国した時、乗員・乗客を合わせた数は11人から9人に減っていた。

波乱の旅路を経て辿り着いたジョハネスバーグは、裏切りや騙し合いが横行し、暴力が蔓延する危険に満ちた大都市だった。当てにしていた親族や知人・友人の裏切り、若い女性が一人で生きるために支払わされる代償、複数の小さな悲劇が重なって起きた大きな悲劇など、本書で語られる物語の多くが読者をやるせない気持ちにさせる。登場人物の多くが悲劇的な結末を迎え、極端な例と感じられる物語もある。だが、本書の魅力はリアリティ溢れる描写が随所に見られるところにあり、その中には非正規な移住者として彼（女）らが生活のために行ういくつかの違法行為も含まれる。外から彼（女）らに接触する研究者＝評者には書きづらい話であり、小説＝フィクションという肩書があるからこそ書くことのできることもある、と感じずにはいられなかった。

アフリカ系外国人を標的とする排斥行為がしばしば暴力的な形で爆発する南アフリカで、移民として生活するのは容易ではない。正規の滞在資格を持たないならば、なおさら苦労は多い。それでも、ジョハネスバーグに移住して、ある程度満足のいく生活や望んだ成功を手にいれられる人がいる。生きていくために努力を重ねつつも不幸な結末を迎える人がいる。両者の違いはどこにあるのか。本書を読む限り、評者には能力や意志よりも「運」が人びとの人生を左右するように思われてならない。

佐藤 千鶴子（さとう・ちづこ／アジア経済研究所）

